

『珠玉節用万代宝匣』の異相

佐藤貴裕

## はじめに

『新撰節用集』（元禄三年刊）という節用集がある。一七世紀末期のものとしては書名も短く簡素であり、付録類も備えられていない。これが、『珠玉節用万代宝匣』（享保初めごろ刊。以下『珠玉節用』）として、享保ごろの節用集らしい書名と、神功皇后をはじめとするいくばくかの頭書挿絵、そして絵入り付録が施された。

単なるアップ・デートなら他の書名でもよいし、頭書挿絵に神功皇后を配さなくともよいはずである。そこで、なにゆえそのような改編をおこなったかを問うてみたい。そして、そのことを通じて、近世節用集編纂のありようや経緯・理由を記述する手掛かりを得ようと思う。

## 一 「思い」をくむ

近世節用集は営利出版上の商品なので、利益を得るための工夫が、書名・本文・検索法・付録など全編におよぼされる可能性がある。一方、こうした工夫とともに、あるいは別のものとして、編者・書肆の何らかの「思い」が添えられることがある。記述的研究の豊かな展開のためには、そうした「思い」までも掬いあげたく思うし、それができる手法を模索したく思っている。

一例を挙げよう。『字彙節用悉皆蔵』（宝暦一三年、藪田甚兵衛刊。以下『字彙節用』）は、節用集でありながら、倭玉篇のように、一つの漢字に多くの別訓を掲げるものである。そのため、漢字二字以上の語では、漢字と漢字のあいだにも別訓が隙間なく挿入されて、一語としてのまとまりが分かりづらくなっている。そもそも、語形（音）と意味（義）

から漢字(形)を引く節用集に、多くの別訓を掲げることがどれほど期待されていたようか。<sup>(1)</sup>その上、紙数を要するの  
で価格も割高になることが予想されるが、実際、売れ行きは不振だったらしく、藪田家では再版することなく手放し、  
永田調兵衛・俵屋清兵衛によって文化八年に再版されただけのようである。

書肆として冷静に検討していれば、こうした不振は確実に予想できるから、出版にも踏み切らなかったであろう。  
それを踏み切ったところに「思い」の強さを感じるが、その内実は分からないので、大部で風変わりな節用集と把握  
するだけであつた(佐藤二〇〇〇)。もちろん、これは良策ではなく、たとえば、倭玉篇と節用集との融合を試みる「熱  
意」<sup>(2)</sup>と、それを出版する「決断」<sup>(3)</sup>とに切り分けて評価すべきかなども考えた。

そこに、この二つの「思い」の一端を知らせる一文を、米谷隆史氏より示された。宝暦一三年版と目される氏蔵本  
の見返し丁の表側、つまり、普通なら表紙と糊付けされて目に触れない部分に刷られているという。

此字彙節用集は亡父浄因老編集せる所也。然るに存□之中八十有余にして筆を取り、故に老衰心に任せず、今  
一二におよんで遺言して世を去れり。よつて其欠たるを補ひ□、これを板行す。今年十七回の忌にあたれり。則、  
為追善、牌前に備へ、亡霊を慰し、且は世上に流布するものなり。(私に句読点を付した)

特徴的にすぎる『字彙節用』は、故・藪田浄因が老体に鞭打った遺著であり、その出版は、故人の遺志であるとも  
もに遺族の決断だったことが知られるのである。少なくとも出版への思いや経緯は明らかにされたことになる。

この一文は、一七回忌記念という私的なもので目に付きにくい箇所忍ばせてはいるが、そのお蔭で接するこ  
とができた。とすれば、どこにも明記されないために、我々が気づけずにいる「思い」は、他にもあるのではなから  
うか。刊行事情はもとより、板株をえるには至らなかった意匠や、意匠とも言えぬさやかな機知や遊び心、ちよつ  
とした心遣いまでもが人知れず盛り込まれているのかもしれない。そうした様々な意図をすくいとれば、それはそ  
のまま、節用集の記述研究を豊かにするはずである。

ただ、現代の我々はどれほど気づけるだろうか。広く当時の時代状況を把握しつつ、多くの事例に接するほかない  
ことであるが、一例として、『珠玉節用』をとりあげようと思う。本書は、後に示すように独特の特徴を備えるので、  
込められた意図にも気づきやすいと思うが、例題としてはかえって好都合かと思う。

## 二 『珠玉節用』とは何か

『珠玉節用』は、山田忠雄(一九六二)に収載されず、『国書総目録』にも「享保書籍目録による」という、間接的  
な記載しかないが、神戸女子大学・玉川大学・東京大学国語学研究室・米谷隆史氏・筆者などの蔵書が確認できる。  
体裁などは、句点の位置が特徴的なほかは、美濃判縦本であることをはじめ、ほぼ近世節用集の通例にしたがう。

巻頭 挿絵入りの日用教養記事の付録(六丁)

本文 イロハ・意義分類検索。真草二行表示。頭書には要語注を配し、まゝ挿絵をまじえる。後掲図版を参照。

表記 楷書表記右傍にも平仮名で別訓を表示。見出し間の境界は句点によるが、左方下部に指すのを原則とす  
る。<sup>(4)</sup>

巻末 本文最終丁末二行、および次丁(裏表紙見返し)に付録あり。

刊記 「難波書肆 北御堂前」の下に「寺田与右衛門／毛利田庄太郎」。刊年は不記。

内題角書に「享保新撰／続字大全」とあり、享保一四年刊『書籍目録』に「珠玉節用集」と見える。大坂本屋仲間  
記録の「開板御願書扣」は、享保九年以降の開版願書の写しだが、『珠玉節用』の控えはないことから、本書は享保  
元年から享保八年までの刊行と目される。

『珠玉節用』の前身に、大阪市立大学にのみ所蔵の確認される『真草／両点』新撰節用集〔後編〕がある。同版

| 新撰節用集 | 頭書増補 | 広益二行   |
|-------|------|--------|
| 1     | 1    | 1 乾    |
|       | 2    | 2 雷公   |
|       | 3    | 3 雷    |
|       | 4    | 4 霰    |
|       | 10   | 5 巖倉   |
|       | 15   | 6 石上   |
|       | 32   | 7 巖    |
|       | 12   | 8 伊羅胡崎 |
|       |      | 9 五十狭々 |
|       | 14   | 10 沙   |
|       |      | 11 砂   |
|       |      | 12 岩   |
|       |      | 13 磊   |
|       | 26   | 14 池   |
| 2     |      | 15 沼   |
|       |      | 16 小井  |
|       | 18   | 17 射場  |
|       | 23   | 18 窟   |
|       |      | 19 岐破  |
|       |      | 20 一閉伊 |
|       |      | 21 一部  |
|       | 19   | 22 石橋  |
|       | 20   | 23 磴   |
|       | 21   | 24 缸   |
|       | 22   | 25 板橋  |
|       | 25   | 26 瑞籬  |
|       |      | 27 五十垣 |
|       |      | 28 玉垣  |
| 3     | 28   | 29 板敷  |
|       |      | 30 板底  |
|       |      | 31 五十串 |
|       |      | 32 温泉  |
|       | 27   | 33 泉   |
|       | 31   | 34 巖   |
|       | 43   | 35 臺   |
|       |      | 36 盤   |
|       | 35   | 37 礎   |
|       | 36   | 38 磧   |
|       | 38   | 39 家   |
|       | 39   | 40 宅   |

|    |          |
|----|----------|
| 40 | 41 舍     |
| 41 | 42 屋     |
| 42 | 43 菴     |
| 16 | 44 庵     |
| 17 | 45 廬     |
|    | 46 井     |
|    | 47 市     |
| 19 | 48 廊     |
|    | 49 肆     |
| 20 | 50 院     |
| 21 | 51 洫     |
|    | 52 田舎    |
|    | 53 夷中    |
| 30 | 54 一口    |
|    | 55 陰陽    |
| 22 | 56 一氣    |
| 23 | 57 市場    |
| 25 | 58 井磧    |
|    | 59 堰     |
|    | 60 埭     |
| 24 | 61 一(井)関 |
| 26 | 62 不知哉河  |
| 11 | 63 蔽島    |
| 34 | 64 礪     |
| 27 | 65 礪     |
| 28 | 66 生田浦   |
| 29 | 67 域     |
| 30 | 68 伊香保沼  |
| 31 | 69 牽牛    |
| 32 | 70 異国    |
|    | 71 夷国    |
| 29 | 72 狗防    |
| 33 | 73 檻     |
| 34 | 74 衣鉢関   |
|    | 75 印南野   |
|    | 76 胆吹    |
|    | 77 井手玉川  |
|    | 78 猪名川   |
|    | 79 一嶋崎   |
| 35 | 80 石提山   |
| 38 | 81 盤城    |
| 36 | 82 生松原   |
| 37 | 83 岩余野   |
| 39 | 84 石瀬杜   |
|    | 85 石山    |
|    | 86 濠小川   |

|    |          |
|----|----------|
| 40 | 87 石田    |
| 41 | 88 泉川    |
| 42 | 89 桃川    |
| 43 | 90 伊波世野  |
| 44 | 91 伊勢嶋   |
| 45 | 92 生野    |
| 46 | 93 岩代    |
| 47 | 94 入佐山   |
| 48 | 95 入野    |
|    | 96 掛保    |
|    | 97 斎蔵    |
| 49 | 98 伊予湯   |
|    | 99 入間    |
| 50 | 100 引佐細江 |
| 51 | 101 岩木浜  |
| 52 | 102 岩田川  |
| 53 | 103 遊糸   |
|    | 104 野馬   |
| 54 | 105 砦    |
|    | 106 岨    |
| 55 | 107 曲江   |
| 56 | 108 池筋   |
| 57 | 109 岩裕   |
| 58 | 110 新熊野  |
| 59 | 111 生駒山  |
| 60 | 112 盤手社  |
|    | 113 岩間寺  |
| 61 | 114 飯室   |
| 62 | 115 出石   |
| 63 | 116 硫黄嶋  |
| 64 | 117 石和   |

なので右にあげた特徴はほぼ重なるが、短く簡素な書名や、巻頭・巻末に付録がないのは当時の通例とは異なる。刊記は、本文最終丁の末二行に「元禄三庚午五月十六日／書肆／京城銅駄坊 村上勘兵衛鑲梓／大坂御堂前 森田庄太郎繡板」と記される<sup>(5)</sup>。書名と付録以外は十七世紀末期の節用集としてそう違和感のないものである。

しかし、その本文は、近世節用集中、ほぼ唯一と称してよい特徴的なものである。近世節用集のうち、イロハ・意義分類をとり、乾坤門からはじまる伝統的な検索法を持つものでは、冒頭語を「乾」とするものが圧倒的に多い。山田(一九六二)によれば『節用集』易林本初刊本以下一九六本がそうであり、ついで「陰陽」とする『新刊節用集大全』ほか一四本、「伊勢国」とする『女節用集墨囊家宝大成』など三本、「菴雲」とする『悉皆世話字彙墨宝』一本がある。ところが、『新撰節用集』は右のどれでもなく、「寔」を冒頭語とする孤例なのである。

その本文は「広益二行節用集の抄出」(米谷二〇三)という。そこで『広益二行節用集』(貞享三年刊。以下『広益二行』)のイ部乾坤門の全見出しを掲出し、『新撰節用集』と、比較のために『頭書増補二行節用集』(寛文一〇年刊。以下『頭書増補』)の収載状況を一覧したのが右表である。数字はそれぞれのイ部乾坤門での出現順である。

表から知られるように、『広益二行』の収載語のうち、『頭書増補』の収載語と重複するものを避けて一書としたのが『新撰節用集』なのである。<sup>(6)</sup>語の順序も『広益二行』のをほぼ踏襲するので両者の関係が密であることが知られる。ならば『新撰節用集』の独自語「18井土」も、実は『広益二行』の「46井 47市」を誤認したものと考えられよう。

差分だけで一書とすることは『新撰節用集』の内題にも示されていた。「真草／両点」新撰節用集(後編)における「後編」がそれである。未確認の存在である『前編』があり、それは『頭書増補』のような本文を持っており、『前編』『後編』相俟って『広益二行』と同等になるような節用集が構想されたのであろう。改題書『珠玉節用』でも、内題角書中に「統字」との語があり、やはり統編であることが自覚されている。ただ、『頭書増補』のような本文をもつ節用集は巷にあふれていたから、初めから「前編」は存在しなかったと考えた方が無理がないかもしれない。

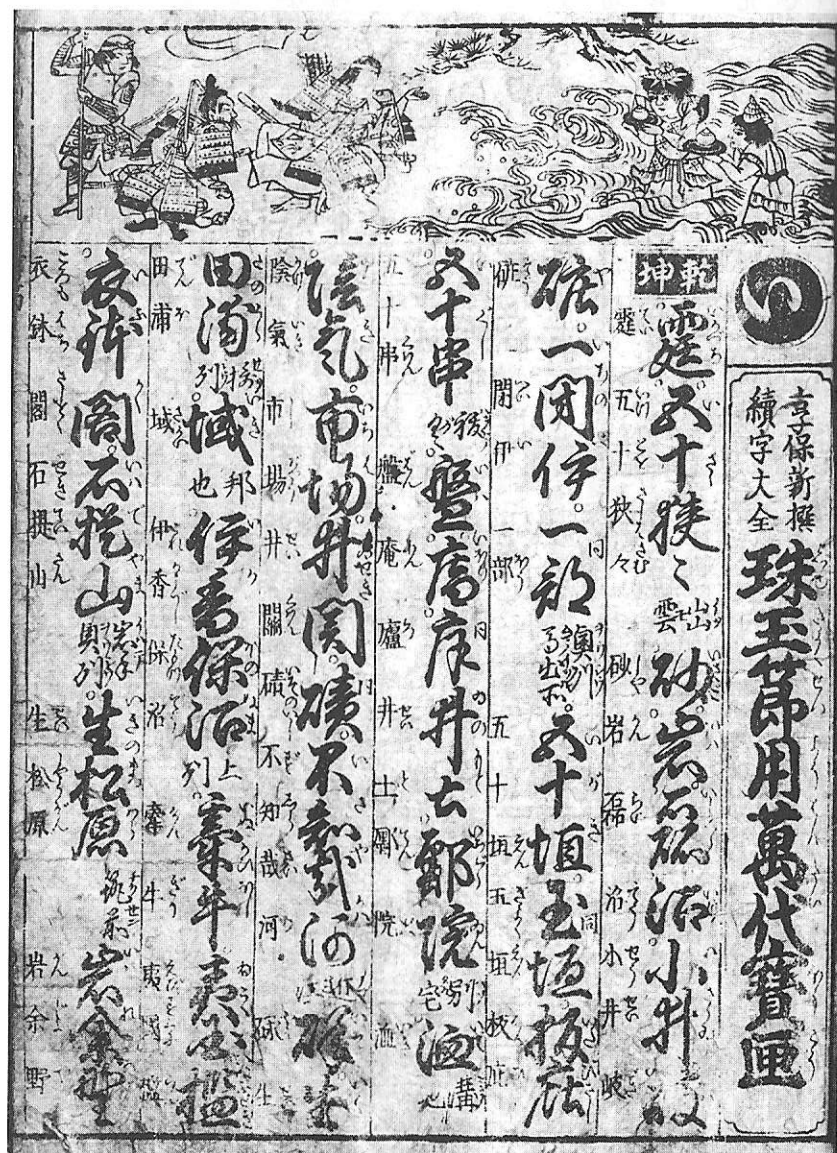
元禄以降の節用集は、付録内容で差別化を図ろうとしていた。初めて節用集を手にする人ばかりならそれでよいが、肝心の本文が大同小異なので二冊めを購入させることは容易ではなかったはずである。実は、すでに一冊所持している人こそ、文字・書記への関心も財力もあるはずだから、本文内容のまったく異なる節用集を編めば、相応の確率で二冊めを購入させられる——そうした目論見のもと、『新撰節用集』が編まれたため、特異な本文になったのであろう。いわゆるニツチ（隙間）商品的な着眼だが、それだけに巧妙な発案だったかと思う。

### 三 神功皇后の起用

さて、『新撰節用集』を一八世紀的に装わせたのが『珠玉節用』だが、そこで気になるのは、新たなものはもとより、既存のものを廃して改めた部分である。一つは書名（内題）だが、もう一つは本文最初丁の頭書挿絵である（左図参照）。これはおそらく、神功皇后の三韓出兵にまつわる場面であろう。<sup>(8)</sup> 浜辺には武装した青年と武内宿禰と皇后、浅瀬の二人は頭頂に貝を載せ、玉を捧げるので安曇の磯良らなのであろう。『太平記』巻三九の一節とよく符合している。

磯良感に堪兼て、神遊びの庭にぞ参たる。其貌を御覧するに、細螺・石花貝・藻に棲虫、手足五体に取付て、更に人の形にては無りけり。神達怪み御覧じて「何故懸る貌には成けるぞ」と御尋有ければ、磯良答て曰く「我滄海の鱗に交て、是を利せん為に、久く海底に住侍りぬる間、此貌に成て候也。浩る形にて無止事御神前に参らんとぞ辱しきに、今までは参り兼て候つるを、曳々融々たる律雅の御声に、恥をも忘れ身をも不顧して参りたり」とぞ答申しける。聽て、是を御使にて、龍宮城に宝とする干珠・満珠を被借召。龍神即応神勅二の玉を奉る。（日本古典文学大系にもとづく。以下、特に断らない場合は同じ）

『八幡愚童訓』や謡曲『香椎』では玉を借り受ける部分が詳しく語られるが、『太平記』とは小異がある。





シテ抑南膽部州。秋津島。神功皇后の宣旨に依つての勅使なりと。海中に向つて宣へば。沙伽羅竜王是を聞き。小竜を出し。此方へ入らせ給へと申されしかば。勅使三人小竜の後に付き。竜宮城へ入り給ふ。シテ「皇后の宣旨の趣。審らかに申しければ。日本は神國たり賢王なり。いかで宣旨を背くべき。然も竜女の身として。人王の后に立たん事。かつうは面目たるべしとて。この二つの玉を奉りけり。曲「干珠といふは白き玉。満珠といふは青き玉。豊姫と右大臣に持たせ参らせて。三日と申すに竜宮を出で。皇后に参らせさせ給ひけり。〔香椎〕。『謡曲三百五十番集』日本名著全集」

なぜ神功皇后が挿絵に用いられたのが問題だが、三韓出兵の成果として漢字がもたらされたとされていたからであらう。『珠玉節用』より後の節用集ではあるが、その経緯を序に掲げるものもある。

其時神功皇后三韓を征罰し給ひし時、国の宝とする物を奉るべしとありしかは異国より王仁といへる博士を奉る。皇后其故を尋給ふに此国は賢人を以て宝とすと答へしとかや。国家を治る事学文なふして政道なりがたし。其学文の道も文字なくしては学び得がたし。しかのみならず諸民の営む業日々に文字なふして并用達する事あたはず。〔万宝節用富貴藏〕天明八年刊

ならば、漢字を引くための節用集に三韓出兵にまつわる挿絵があつても不自然ではないが、他の節用集でこれほど神功皇后を前面に立てるものはないようなので、やはり『珠玉節用』と皇后との関係を問う必要がある。

考えておいてよいのは当時の社会状況である。皇后の出兵では相手を屈伏して朝貢を約束させることになるが、この、朝鮮半島の人々が来日するという図式は、近世では朝鮮通信使に重ね合わされよう。享保ごろの朝鮮通信使は、正徳元（一七一）年と享保四（一七一九）年というように、一〇年も置かずに訪れるが、この前では天和二（一六八二）年であり、後では延享五（一七四八）年となつて、それぞれ三〇年近くの間が開く。正徳・享保期の通信使がいかに接近していたかが知られるが、それだけに当時の人々の印象に残りやすく、熱烈に歓迎したことが想像される。こ

した世情に乗じて紀海音『神功皇后三韓責』をはじめとする作品も作られたという。

上演年時享保四年五月十五日／宝暦版『外題年鑑』による。享保四年九月に、朝鮮来聘使の一行が江戸に下つているが、その当込みがあつたかと思われる。一行に対する受入準備は、京でも宿舎にあてる本能寺方丈・塔頭の修復の爲の入札を二月に行う（『月堂見聞集』）など、早くから世間の注目するところであつた。同年二月十四日に竹本座でも『本朝三国志』が上演され、第五段に「御前あやつり男神宮皇后」がおかれている。藤井紫影博士が、『近松全集』の同解題で「本年は朝鮮聘使来朝の筈にて世人の噂に上りたるより、此狂言を思ひついたものなるべく、豊竹座が間もなく神功皇后三韓責を出したのも同様の興行政策と思はれる」と述べられたのは、卓見であらう。前年の顔見世二の替りで、京都の大和山座が上演した「子康腹帯」に「神功皇后」の角書を付す（『役者芸相撲』挿絵）のも、こうした傾向の早い現われかと思われる。（海音研究会編『紀海音全集』第五卷）

少しさかのぼるが、正徳五年には歌舞伎『神功皇后三韓退治芦分船』が初演されており、朝鮮半島ではないが、「明朝の遣臣鄭芝竜の日本亡命中の子和藤内（国性爺）が、明国の回復を図ることを脚色」（『広辞苑』第六版）した『国性爺合戦』も初演され、一七か月におよぶ続演を記録するのである。

こうした異国・朝鮮半島へのブームのような世情をとらえて、『珠玉節用』の挿絵に神功皇后を登場させたことを考えてよいのではなからうか。ひいては、このようなあてこみを契機に『新撰節用集』から『珠玉節用』への改編も企画されたかと思われるのである。だとすれば、当時の節用集には、世情に対する、浄瑠璃並みの臨機応変な即応が許されたのであつて、このような形でも近世節用集が社会的存在であることがうかがわれることになるのである。

#### 四 改編の拙速

『珠玉節用』には、改編によるさまざまな齟齬が認められる。これをそのまま、あてこみを立証するものとは捉えられないが、その前の段階として、改編がいかに拙速に行われていたかを確認することはあってもよい。また、改編計画がどこまで周到であつて、どこまでがどのように杜撰であるかを知っておくことは、記述的研究の視点からも価値あることと思うので、以下に見ておくこととする。

まず、丁付けが問題になる。辞書本文の最初の丁のは「三」であり、これは『新撰節用集』の丁付けを引き継いだものである。大阪市立大学本では、本文の直前に「改正節用集」と題した扉があり、その前にもう一丁あるはずだが、それは見返しにあたるので、これも一丁と数えれば『新撰節用集』の丁付けに破綻はない。ところが、『珠玉節用』で加えられた巻頭付録は六丁なので食い違うことになる。そこで辻褄合せに、付録の最終の丁付けを「六ノ二」とするのである。付録の六丁めであり、辞書本文へ接続するものとして二丁めということになる。丁数を一〇丁単位に飛ばすことはまま見られるが、「六ノ二」のように減ずる例は少なく、それだけに、いかにも間に合わせの策と見える。また、『珠玉節用』の尾部最終の丁付けは「四十七終」、次丁は「四十八始」とあり、コ部最終丁は「八十七終」、次丁は「八十八始」とある。これは、三巻構成の『新撰節用集』の丁付けの名残りで、上・中巻の終わりと、中・下巻の始まりを示すものである。頭書にも同期する例があり、四八丁表の頭書一行めに「新撰節用集中」と見え、八七丁裏の頭書最終行には小さく「ヲハリ」とある。中巻の始終を示すものである。三巻構成を歌っていない『珠玉節用』とは整合しないうえに、旧称が堂々と残るわけで、「珠玉節用万代宝匣」と改題した本書にとっては不整合の極みであらう。

旧称の残存は柱題にもある。巻頭付録の柱題は「珠玉節用」なので「珠玉節用万代宝匣」と呼応するが、本文では「新節」であつて、やはり旧態が残っている。それだけならまだしも、実は『新撰節用集』の柱題は「新節 上(中・下)」と巻別を示すのだが、『珠玉節用』では巻別だけは削除するのである(一部削り残しあり)。旧称も一緒に削れそ

うなものだから不可解である。さらに、三巻構成の標示を柱題では消すにもかかわらず、右のように丁付けや頭書での標示は残すのだから、いよいよ不可解である。間に合わせ作業ゆえの混乱を露呈するのである。

ついでにいえば、『新撰節用集』では柱の下方に、各部の最初の丁については当該部名が陰刻されていた。現代の五十音順の辞典・事典で見られるツメ(サム・インデックス)のように働くものである。こうした有用な工夫も『珠玉節用』では彫りさつている。手間を惜しんでいるのか、いないのか判然とせず、有用性の判断も誤っている。改編方針が周到でないどころか、迷走を思わせるのである。

実は、柱題については、新たな内題に「新」の一字を含ませれば問題ないのだが、それはせずに「珠玉節用万代宝匣」と命名するのだから、新たな書名には確固とした「思い」があるものと思われる。細部では不手際が目について、書籍の顔でもある書名にこそ周到な配慮がなされていることは十分に考えられる。次節に検討してみたい。

## 五 書名要素と神話世界

「珠玉節用万代宝匣」との書名は、財宝・永遠をあらわす要素や短縮形「節用」の使用、そして「節用」を前半に置くことなど、一八世紀前半の書名作法を踏まえている(佐藤二〇〇一・二〇一二)。「匣」のような入れ物を示す字が末尾に来るのも次のような先例があり、不審とするにおよばない。

藏 大大節用大家藏(元禄一六年ごろ)・大海節用和国宝藏(宝永七年ごろ) など一〇例以上

袋 女節用集文字袋(宝永六年刊)・字福節用大黒袋(正徳四年ごろ)

ただし、「珠玉・宝匣」は他の節用集にみえず、「万代」も節用集史上『珠玉節用』が初めて用いたものである。<sup>(10)</sup> それぞれに導入された理由を考察する価値があろう。

まず、「珠玉」だが、「海から産する玉と、山から産する玉。真珠と玉」（『日本国語大辞典』第二版）のように説明されることが多い。海と山が相對することになるが、こうした「対・対立」は神話の世界には少なくない。

うみさち・やまさち【海幸山幸】日本神話の一つ。彦火火出見尊（山幸彦）が兄の火照命（海幸彦）と獵具をとりかえて魚を釣りに出たが、釣針を失い、探し求めるため塩椎神の教えにより海宮に赴き、海神の女と結婚、釣針と潮盈珠・潮乾珠を得て兄を降伏させたという話。天孫民族と隼人族との闘争の神話化とも見られる。また仙郷滞留説話・神婚説話・浦島伝説の先驅をなすもの。（『広辞苑』第六版）

神功皇后の干珠・満珠にあたる潮乾珠・潮盈珠が現れるのが注意される。また、兄と弟も対であり、海神に助けられたのが海幸彦ではなく山幸彦であるのも対立・対を意識させる。

『珠玉節用』では、その本文が『頭書増補』のごとき節用集を補完するものだったが、これも対を意識させる。干珠満珠のごとく、両者相俟って効果を發揮するわけである。また、句点の指し方も通例とは逆に左方に置くのであった。運筆上不自然のようだが、それは「語・字の終わりに付す」と見るからであり、見出し間の境界を示すのである。日本語の文字では左から右への運筆が多いこともあわせ考えれば、左上の句点から書き始めるのも不自然とはいえない。ともあれ、右下に句点を付す通例と同じ効果が得られるから、ここにも対・対立を認めてよさそうである。右のような対立・対が意識されるにしたがって、「珠玉」という要素の選ばれた訳に気づかされていく。その語が財宝に属する語でもあることは、一八世紀前半の書名作法にも合致し、さらには神功皇后説話を介して朝鮮通信使の来日ブームにまで結びつけられるのだから、巧妙な着想と評価すべきであろう。

「宝匣」にうつる。神話世界からかわりそうなものを探せば、やはり浦島子の「玉匣・玉手箱」に思いいたる。『丹後国風土記』（『釈日本紀』所引逸文）には「匣」字の使用も認められるところである。

乃ち、玉匣を撫でて神女を感思ひき。ここに、嶼子、前の日の期りを忘れ、忽ちに玉匣を開きければ、即ち瞻る間に、芳蘭しき体、風雲に率ひて蒼天に翻飛けりき。嶼子、即ち期要に乖違ひて、還、復び会ひ難きことを知り、首を廻らして踟躕み、涙に咽びて徘徊りき。ここに、涙を拭ひて哥ひしく、

常世に 雲たちわたる 水の江の 浦島の子が 言持ち渡る。

神女、遙かに芳しき音を飛ばして、哥ひしく、

大和べに 風吹きあげて 雲放れ 退き居りともよ 吾を忘らすな。

武笠俊一（二〇〇七）は、この一節から、玉匣を、異界との通信手段とみている。ならば「宝匣」の形ではあるが、この書名要素は、漢字を引くための節用集には真にふさわしいものとなろう。朝鮮通信使と日本人との交流・意思疎通が、ほかならぬ漢字を用いる詩文の贈答によるからである。ただ、武笠の説には「芳蘭しき体」（芳蘭之体）の解釈ほか、従うべきか迷う点もあるので可能性を指摘するにとどめておく。

ところで、御伽草子「浦島太郎」は、本地譚を挿入するなどして浦島子伝のありようを変えたといわれる。

浦島は鶴になり、蓬莱の山にあひをなす。亀は、甲に三せきのいわをそなへ、万代を経しと也。扱こそめでたき様にも、鶴亀をこそ申（し）候へ。只人には情あれ情の有（る）人は、行く末めで度由申（し）伝たり。其後、浦島太郎は、丹後国に浦島の明神と顕れ、衆生済度し給へり。亀も、同じ所に神とあらはれ、夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。

ここでも、浦島と姫（乙姫・亀姫）の対が確認でき、それが変じた鶴と亀も古くから知られた長寿を象徴する対である。そして「万代」が現われるのが注意される。しかも「珠玉節用万代宝匣」では「万代」と「宝匣」が続けて配されるので、御伽草子型浦島子伝を踏まえたかのようなのである。やはり『珠玉節用』での「万代」導入は、単に永遠を意味するのではなく、神話世界・説話世界を介して了解されるような必然性があるように思われるのである。



このように、挿絵だけでなく書名からも、神話世界への連なりが認められた。もちろん、それは書肆店頭にあられた購入予定者に、あたかも本歌取りのように神話世界へと思いを馳せさせ、さらには購入することでそれが手中にできるように錯覚させる効果もあっただろう。それこそが『珠玉節用』の命名の思惑なのではなからうか。

そしてこのような一連の改編企画の発端は、やはり朝鮮通信使の来日によると考えてよいだろう。そのような世事に即応することが、『珠玉節用』という節用集の書名からは見てとれることになり、それはそのまま、近世節用集が社会的存在としての面を示す一例と捉えられるであろう。

### おわりに

『珠玉節用』にひそむ意図を汲んでみたが、このような改編を施したのが何者であるかが気になるところである。当時、工夫を凝らした往来物や通俗辞書類を編んだものに中村平五（三近子。一六七一―一七四一年）があるが、山本序周の名も浮かぶ。その人となりは分かっていないが、著作は『珠玉節用』の刊行されたであろう享保はじめごろに集中する。『国書総目録』などによれば次のようなものがある。再版ははぶき、より古い版が知られるものは注した。

女節用集文字袋

享保六（一七二一）年刊。宝永六（一七〇九）年版あり（若杉哲男一九八六）

女源氏教訓鑑

正徳三（一七二二）年刊

絵本故事談

正徳四（一七二四）年刊

男節用集如意宝珠大成

享保元（一七二六）年刊。これを遡るかという刊記脱落本あり（若杉一九八六）

文林節用筆海往来

享保四（一七二九）年刊。享保二年刊本あり（小泉吉永）<sup>11</sup>

一七〇九年から一七二七年という比較的短い活動期間だが、このなかでは『女節用集文字袋』『男節用集如意宝珠

大成』<sup>12</sup>（以下『女節用集』『男節用集』）が、先に見た「対立・対」を構成しており注意される。『男節用集』の「如意宝珠」も干珠・満珠につながるが、『日本書紀』の、三韓出兵以前の神功皇后の記事も参考にならう。

秋七月辛亥朔乙卯。皇后泊豊浦津。是日。皇后得如意珠於海中。（仲哀天皇二年七月乙卯）

本文の表記にも類似がある。先述のように『珠玉節用』では見出し間の境界表示の句点を左下（あるいは左上）に指すが、『女節用集』『男節用集』もそうなのである。<sup>13</sup>これは両書が行書一行表示のため、漢字右方にくる読みとの干渉を避けてのことだろうが、たととしても当時の通念とは逆位置だから『珠玉節用』と結びつける特徴としてよからう。ただし、『珠玉節用』の句点は元禄三年刊の『新撰節用集』を引き継いだもので、山本序周は関与しない。『女節用集』『男節用集』の編纂資料として『新撰節用集』を書肆から示され、句点位置の効用に気づいたものと想像されるが、それは山本序周が『珠玉節用』の編者であると確定してから考えればよからう。

### 注(1)

たとえば、別訓を多く掲げることで、当該字の中核的意味なり、意味宇宙とでもいえそうなものを悟らせるような、一種の教育的な配慮などが想定されないではない。もちろん、板株取得のための工夫としては十分独創的であろう。

(2) 早くから敷田が別訓揭示に熱心だったことは佐藤（二〇〇〇）を参照。一例をあげれば、敷田版『頭書増補節用集 綱目』五行本（元禄前半には刊行か）の題簽に「鼈頭節玉用編」とあるという（山田忠雄一九六一）。節用集と（和）玉篇の互字による書名であり、両者の融合が早くから意図されていたことが端的に知られる。

(3) もちろん、節用集と倭玉篇との融合の発想経緯まで知られるものではない。なお、見返し丁の表面に序などを記すのは、他に『頭書大成節用集』（元禄八年刊。架蔵）などの例がある。

(4) 見出し境界の中央や右寄りに指される例もある。また、左右に一点ずつ付すこともある。たとえば1丁め表の二行めの「霆・五十狭々」間、「砂・岩」間などがそうである。行頭語や意義分類の最初の語では左上に付すこともある。

(5) なお、見返しには「頭書 貞享著雅執徐歳／新撰節用集／両点 浪華森田永英刊版（印）」と大書されている。貞享五年（元禄元（一六八八）年）に成立がさかのぼるのかもしれない。

- (6) 補足にのみ徹した節用集には、他に『増字百倍』早引節用集(宝暦一〇(一七五〇)年刊)を補足する『早引残字節用集』(天明五(一七八五)年刊)があるだけである
- (7) ただ、『珠玉節用』が再版された形跡はないので、売れ行き自体は芳しくなかったか。なお、注(6)で参照した『早引残字節用集』も再版されず、天明八年に『増字百倍』早引節用集と合冊刊行され、寛政八年以降は『大全早引節用集』の「増字」として吸収された。節用集における続編は売れゆきが悪いものなのかもしれない。
- (8) あるいは浄瑠璃・歌舞伎の実際の場面を写したのもとも思われるが、元の作品を特定できていない。
- (9) 『歌舞伎年表』による。なお、同年表では「神功」に「じんこう」と振り仮名し、索引もそれにしたがう。
- (10) 『珠玉節用』の刊行が享保一八年以降に下れば、『万代節用悉皆字彙』(享保一八年刊)が先になる。ただし、この書名は原書にもとづいて確認したものではなく、『国書総目録』の情報によるものである。
- (11) ホームページ「往来物倶楽部」の [http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a.r/sinhaken\\_066-070.htm](http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a.r/sinhaken_066-070.htm) による。
- (12) とともに語注の豊富な、工夫のある著作である。若杉(一九八一・一九八六)、木村晟(二〇〇八)参照。
- (13) なお、『女節用集』は割注を従える場合でも見出しのあとに句点を置くが、『男節用集』ではそこまではしない。先に成立した『女節用集』では几帳面に付すが、後発の『男節用集』では簡潔になったようである。

参考文献

- 木村 晟 (二〇〇八) 『江戸期女性語辞典』二、港の人
- 佐藤貴裕 (一九九〇) 「近世節用集における引様の多様化について」『国語学』一六〇
- (二〇〇〇) 「節用集の世界―典型と逸脱―」『月刊しにか』一一・三
- (二〇〇二) 「近世節用集書名変遷考―一七〇〇年前後の転換期まで―」『国語語彙史の研究』二〇
- (二〇一二) 「近世節用集書名変遷考―字数と基称―」『国語語彙史の研究』三一
- 土屋信一 (二〇〇三) 「女節用集小考」『香川大学国文研究』二八
- 水野 祐 (一九七五) 『古代社会と浦島伝説』上下、雄山閣
- 武笠俊一 (二〇〇七) 「玉匣から玉手箱」『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科研究紀要) 二四
- 山田忠雄 (一九六二) 『開版』節用集(分類)目録』自家版

- 米谷隆史 (二〇〇〇) 「男節用集如意宝珠大成の編纂をめぐる」『国文研究』四五
- (二〇〇三) 「近世中期節用集の意義分類をめぐる」『国語語彙史の研究』二二
- 若杉哲男 (一九八二) 「女用語彙と男用語彙(一)」『仁愛女子短期大学研究紀要』一二
- (一九八六) 「文林節用筆海往来をめぐる」『国語史学のために』第一部、笠間書院

付記

本稿では、科学研究費補助金・基盤研究(C)「近世辞書の学際的・社会史的研究のための調査と基礎情報の収集」および基盤研究(A)「書物・出版と社会変容」研究の総合化に向けて(若尾政希)の成果の一部を援用した。

平成二十四年三月十日 印刷  
平成二十四年三月二十日 発行

著者の  
検印  
省略

近代語研究 第十六集

定価：本体一五〇〇円＋税

編者 近代語学会

東京都千代田区神田錦町三丁目十一番地  
発行者 前田智彦  
東京都新宿区東五軒町三丁目十九番地  
印刷者 森元勝夫

発行所

東京都千代田区神田錦町三丁目十一番地  
金蔵 武蔵野書院

電話 (〇三) 三二九一・四八五九 (代)  
振替口座 〇〇一九〇一三六七一四六  
郵便番号 一〇一〇〇五四

モリモト印刷

ISBN978-4-8386-0259-9 C3381